

時事新報

第二千四百八十號
明治廿二年十一月廿一日 休刊無し

明治廿二年十一月廿一日 休刊無し
書曆已丑十月廿九日 (辛、丑)
日出午時六分二十四分
入午時四分三十分
月入午後三時三十分
満月午後三時三十分
西曆一千八百八十九年

時事新報定價

時事新報一年三百六十五日一日休刊セズ其代價遠
送廣告料へ左ノ如シ
一、一箇月前金五十五錢 ○三箇月前金一圓五十錢 ○六箇月前金三
圓 ○一箇年前金六圓
○時事新報社直轄ニテ送送スルモノノ二限り右定價ノ外ニ
箇月十五錢ノ送送料ヲ申付ク
時事新報廣告料前金

一行五號活字廿四號	一日限	六日以上	七日以上
一行	十二錢	十一錢	十錢五分

月曜日并に大祭祝日の翌日等他新聞紙の休刊日に限り
時事新報配達のため此場合は新聞紙の休刊日に限り
前金八錢として地方に郵送する分は此外に貼用する郵
便印紙の代價を申受く可し

人情の變化

西洋の立憲國に於ては申す迄もなく我國の事例に於て
も凡そ政の當局者は兩三年に一回の更迭ある割合にして
て古來の政變大抵は其數に漏るゝものと云ふ蓋し
其更迭を促す外面の事情は種々様々なる中にも當局者
の身上に就て見れば功を以て進み過を以て退くと
云ふ可きのみ古今東西幾種幾様の人物が當局の兩三年
目に必ず一様に失脚するとは甚だ不可思議にして
更に解す可からざるが如く我輩の所見を以てす
れば其原因は他にあらす時の人情の變化に外ならずし
て其體は微妙幽玄の中より發し遂に現はれて政治の
變遷を生ずるものなる可しと信するなり抑も舊を厭ひ
新を好むは人情の自然にして久しく山居するものは山
間の風光を嫌ふて海邊の景色を好み常に肉食する者が
時に野菜を食すれば忽ち其味の淡泊なるを愛し閑窓
雨に困却して快晴を喜ぶは總ての情なれども甚しきは
日和の永續に飽きて却て一雨を望む者さへなきにあら
ず而して政治社會に於ては此人情を加ふるも人々愛憎
の念も亦少なからずして不肖の際は無形の働を遂らし
一旦の機に發して種々の形を現はすに至りては如何なる
其體も亦少なからずして不肖の際は無形の働を遂らし
一旦の機に發して種々の形を現はすに至りては如何なる
其體も亦少なからずして不肖の際は無形の働を遂らし

も是亦人情新を好むの例に漏れざるものにして社會の
風景現在の事物と共に既に秋を催はし人情や、舊に對
して冷ならんとするに際し恰も好し新人の遺方より
來りて渴望の機に投ずるあれば其人の來歴技能は暫く
置き單に目先の變りたる多量の歲月、海外の經歷、何
か新事の所得もあるならんとの想像より只管之を執持
して重きを置くの情あるが如し其待望の當否は兎も
角も其人の一舉一動以て一時の好奇心を惹起するに足
る事實は之を評して俗界の奇相と云ふ可きのみ然らば
此俗情に投ずるものは新人必ずしも新機軸を出すに及
ばず唯物の流行の數年にして舊に復るが如くにして例
へば前年の執權たりし三條内府が今年の更迭に復職し
今後の變革には伊藤伯を再出せしめ前後次第に輪番を
演ずるのみにて可あらんやと云ふも新奇を好むの人情
は輪番の新奇急を厭ふ、時機の服飾再現なきも非
ずと雖も三年前の古衣を裝ふて新奇を誇らんとするも
未だ以て流行世界を壓倒するに足らざるが如く其舊未
だ全く忘れられずして俄に再現する時は却てます
其流行を妨げ可ければなり聞く所に據れば昨今は内閣
の模範定まらずして何れ不日に更迭ある可しと云ふ其
際には内閣首座の地位は勿論その全體に新色を見るが如
きは固より望む可らずして我輩の期する所にもあらざ
れども更迭の度おと一二人にても成るべく新奇の顔
出を以て社會好新の人情を慰め斯くて次第に新陳代謝
を促がし遂には全く一新して新閣色を呈出するも至
らば社會の満足の上ある可らず我輩は今後の閣色如
何を見て以て社會人情の動靜を卜せんとする者なり

○高雄艦 は横須賀造船所に於て一昨年より製中の際
已も出来して去月三十日觀音崎沖にて自然通風全力試
験を行ひ本月二日にも天長節祝賀の爲め横濱港に廻り
同五日横須賀へ歸港し翌六日強風通風全力試験を行ひ
しが兩度の公試運轉共に何の故障もなく充分好結果を
得たる由抑も同艦は新式巡洋艦として容積一千九百餘
噸、實馬力二千五百、長七十メートル、幅十メートル、吃
水四メートル、搭載の大砲も口径十五センチメートル
以上のもの五門の外に機砲砲門を備へ魚形水雷發射
管二個あり機關は兩螺旋槳成種類にして何れも新式な
り又回轉数は全力にて九十五、汽鐘は五個、蒸氣壓力は
七十封度にて公試運轉の節自然通風全力にて速力十三
海里を得、強風通風全力にて速力十四海里を得たり
と是まで同造船所に於て製造の新艦には公試運轉の際
には何かの故障間々あり勝ちなるに今回の如く最初の
一度の公試運轉にて好結果を呈せしは先づ稀なるよ
し右の如く萬事都合よく試験を了りしに付き去る十三
日仁禮司令長官の檢閲を受け同十六日其竣工を祝する
爲め同艦長及同士官が主人となりてクオーターデッキ
パーティーを催し各艦の士官令閣令嬢を招待して盛ん
たる宴會を開き福嶋司令官山本艦長の祝詞ありて主客歡
を盡して散會し同十七日又同艦乗組士官下士以下

○勸業集談會 今二十一日より三日間長野縣下高井郡
役所にては勸業集談會を開散するよし
○免稅の議論、購場の喧嘩 此程の本紙上に廣嶋市會
が免稅ある新稅目を設けて免一頭入付き金五十錢宛を
賦課徴收すべしとの原案を討論し初めは市會の免商
は議場に詰り掛けて討論の模様を傍聴し又市會議員の
私宅を訪問したる者もありし由を記し置きしが何は其
後の報道に依れば今度同市參事會より提出されし免稅
の一案は深く免商の腦を刺戟し既に去る十一日又同
業者中より委員を撰び一篇の意見書を市會に提出した
り其中には免の毛、骨、肉等より得らるべき利益其繁殖
に依て生ずる國益等を列擧し斯る利益ある免に向て禁
止稅を課するに實に迷惑千萬の事なりとの旨を認め
し程まで此の課稅一件より同市内の免商運には俄に其
居を市外ある安藝郡牛田村に移し右新稅の負擔を免れ
んとする目論見をなすものあれば關西免會社なるもの
を新設し其本社は沼田郡宇津川に、支社は安藝郡宇津
川に置き一層事業の擴張を謀り又養免家仲間の惡弊
をも除かんとす詳細の規約嚴重の約定等に就き頗に相
談中あり同商の意氣込をして斯くの如く又別致したる
を見れば其市會の購事に對して喧嘩するは人情の自然
と云ふべし左れば去る十三日の夜に開きたる該免存廢
の會議の折には議員の中に可否の兩説あるのみならず
傍聽人中にも可否の兩派ありて原案維持即ち課稅派の
議員立て腕を述べれば廢案派の傍聽人は彼は嗚呼許言
し又原案廢案即ち非課稅派の議員が論出せんとすれば
維持派の傍聽人騒擾して議事の妨げを事少からざ
るより議長は兩回傍聽人に注意を加へたれども尚ほ
何となく物騒しく充分の討論も出来兼ねるより議長は
斷然傍聽禁止の意見を述べしも議員中其不可を説きて
見合の義を請求せしものありたるを以て禁止の事は其
儘沙汰止みとなりし而して議員中の課稅論者は元來免
の流行は一時偶然の事として決して殖産の基本となす
に足らず蓋し其毛骨骨肉皮各相應の効用あるべけれど
も同營業の性質抄機に類し弊害實に少なからず廣嶋市
の戶數一萬八千、人口七萬餘にして免を飼ふものは二
千七百餘人と聞けば其數少なきが如しと雖も其飼免
家中には随分不都合の營業法行はれ居れり既に弊害よ
べしと説き非課稅者は該營業者中一二不都合の事を行
ひたるものあらんかなれども夫は其人の罪にして營業
其物の弊にあらざれば敢て禁止稅を課するにも及ば
るべしと論せしが原案の免稅一頭五十錢とあるを修正
して一頭十錢とし且つ生後六十日を経過せざるものは
課稅の限をあらすとの説を贊成するもの十四名之に反
對するもの僅に二名即ち十二名の多數にて此修正説に
可決したれば右は二次會の事にしわれは三次會まで如

○新刊書 大日本制海軍 金澤堂發行定價 明治九年より至 史を期するは無 史の著書最も明 たる者ありと云 流暢なれば一夕

何なる議決を見 此免稅の事に關 なければ省きて報 〇賣場規則改 東京商工會員會 改正を要するの 〇市區改正の實 として府廳より 國地近傍實地測 氣象臺の製圖場 師ありと 〇開校式 赤坂 坂小學校は全く 行ひ當日は府廳 同校へ寄附金を 〇奈良京都間の 連絡するの見込 は全く其功を終 本據ある奈良に は京都にも同事 様主を募集する 見なりと云ふを 本據は此處を起 ば第一鴨川の架 橋京都市の極南 とは申すまでも の旅客などには 條より更に船荷 都合よくかた りしかば去る十 五條起立の説 奈良の事務所は 日其筋へ出願 〇關西鐵道工事 九哩十鐘は 且つ電線の架 雲より深川に至 りしかば去る十 一方なる四日市 して安樂川等の 右の安樂川よ 〇南都馬の移畜 二歳以上の雄種 川縣三浦大住の 管にて目下同 〇新刊書 大日本制海軍 金澤堂發行定價 明治九年より至 史を期するは無 史の著書最も明 たる者ありと云 流暢なれば一夕